

懶惰らんだの説

谷崎潤一郎

出典 『谷崎潤一郎随筆集』所収

篠田一士編・岩波文庫

400字詰原稿用紙32枚

懶惰らんだということとは、簡単にいえば「怠けること」である。普通、懶惰らんだの「懶」の字の代りに「懶」の字を使つて、「懶惰」と書くのをしばしば見受けるが、あれは間違いで、やはり「懶惰」が正しいようである。今、簡野道明かんのどうめい氏の『字源』に拠つて調べると、「懶」は「憎懶」などを用い、「にくむ」あるいは「きらう」の意である。「懶」の方は、「ものうし」「なまける」「おこたる」「つかれふす」の意で、柳貫りゅうかんの詩の、

借得二小窗一容二吾懶一

五更レ高枕レ聽二春雷一

という句が引例として挙げられている。なお『字源』から孫引きすれば、許月卿きよげつけいの詩に「半生はんせい 懶意琴三疊らんい きんさんじよう」、杜甫とほの詩に「懶性らんせい 従来水竹居じゆらいすいちくきよ」などがある。

以上の例でも分るように、懶惰は「怠けること」には違いないが、「ものうがる」「億劫おつくうがる」という心持が多分に含まれていることを見逃してはならない。そして一層注意すべきは、「小窗せうまうヲ借り得テ吾ガ懶ヲ容ル」といい、「半生ノ懶意琴三疊」といい、「懶性らんせい 従来水竹居」といい、

いずれも「ものうい生活」の中に自らなる別天地のあることを知り、それに安んじ、それをなつかしみ、楽しみ、或る場合にはそういう境地を見えや気取りにするかの如き傾向の存することである。

この心持は支那ばかりでなく、古くから日本にもあつて、代々の歌人や俳人の吟詠の中に例を求めたら定めし数限りもないであろうが、就中室町時代のお伽草紙のうちには「物臭太郎」という小説さえ作られている。

……ただし名をこそ物臭太郎と申せども、家づくりの有様人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつぎ、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉をうゑ、……錦をもつて天井を張り、桁、うつばり、たる木のくみ入には、白銀黄金を金物にうち、璽路の御簾をかけ、厩さぶらひ所にいたるまで、ゆゆしく作り立てて居ばやと心には思へども、いろいろ事足らねば、ただ竹を四本たて、菰をかけてぞゐたりける。……かやうに作りわろしとは申せども、足手のあかがり、のみ、虱、ひぢの昔にいたるまで、足らはずと云ふ事なし。もとでなければ商ひせず、物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起き上らず、ふせりゐたりけり。

と、こういう書きぶりで筆をすすめてあるこの物語は、純然たる日本人式の着想であつて、支那の小説の焼き直しであるとは思われない。恐らく当時の零落した公卿などが、それこそ作者自身物臭太郎の如き生活をなしつつ、退屈紛れにこんな物を書いたのである。そして、幾分そのせいもあるが、作者はこの手に負えない怠け者の主人公を擯斥しないのみならず、その物臭さ、不潔さ、横着さに、一種の掬すべき愛嬌を持たせているのである。隣り近所の人々からは爪弾きされ、土地の厄介者のように書いてはあるものの、乞食かと思えば地頭の威力を怖れないほどの気骨があつたり、馬鹿かと思えば時の帝の叡聞に達するほどの和歌の才能があつた

りして、とうとうしまいには御多賀の大明神という神様にまで祭られる。

昔、嘉永年間にペルリの船が浦賀へ来たとき、彼らが日本人について第一に感心したことは、他の亜細亜民族と違って如何にも綺麗好きであり、港の町筋や家々の掃除がよく行き届いているという点にあった。さようにわれわれ日本人は東洋に住む人種中では最も活動的であり、最も怠け者でないはずであるが、それでもなおこの「物臭太郎」の如き思想を持ち、文学を持っているのである。「怠ける」ということは決して褒めた話でなく、誰しも「怠け者」といわれて名譽に思う者はないが、しかしその一面において、年中あくせくと働く者を冷笑し、時には俗物扱いにする考は、今日といえども絶無ではない。



此処まで書いて来て想い出したのは、近頃数日にわたって『大阪毎日新聞』紙上に連載されている「米国記者団から見た日本と支那」という記事である。これは最近アメリカの新聞記者連が東洋へ視察旅行に来て、帰国の後にその偽らざる感想をめいめいの紙上で発表した中から、大毎社の高石真五郎氏が面白そうな部分々々を紹介されつつあるもので、今日までのところでは主として支那の悪口が多く、まだ日本へはお鉢が廻つて来ないけれども、あの調子だと日本の方が支那よりずっと好感を持たれているらしい。彼らは支那へ着くと早々、第一に汽車の不潔なことに呆れて、ひどく胸糞を悪くしている。そのくせ彼らの乗った車台は決して普通の客車ではなく、張学良氏が彼らのために京奉鉄道中の最良の車輛を準備させたのだが、それにもかかわらず、彼らは満足に顔を洗うことも髻を剃ることも出来ないような言語道断な目に遭った。これにはいろいろ、絶え間なき国内の争乱とか、財政の窮乏とか、その辺の事情もあろうけれども、現今の満洲は支那において最も秩序の保たれている裕福な地方であり、近年

は内乱も終熄しゆうそくしている形であつてみれば、さしあたり弁護の足しになる口実はあるまい。かくいう私自身も、かつて京漢鉄道の一等車に乗つて彼らと同じ經驗を嘗なめた記憶がある。北平から漢口までざつと四十時間のあいだ、寢台車に雨漏りがするくらいはまだしもとして、尾籠びろうな話だが何より困つたのは便所の掃除が不完全なことで、私は差し迫る必要に駆られながら何度も入口から引つ返したことがあつた。

思うにこういう不潔と不規律とは、いつの時代を問はず支那人には免るべからざる通有性であつて、どんな進歩した科学的設備が移入されようとも、一とたび彼らの經營に委ゆねられれば、忽たちまちそれが支那人獨特の「物臭さ」を帯び、折角の近代的な尖銳せんえいな利器が東洋風な鈍重な物に化してしまふ。清潔と整頓とを文化の第一条件とするアメリカ人なぞの眼からは、許すべからざる無精むしやうとも横着とも見られるであろうが、支那人自身はちつとやそつとの不都合はあつても、用さえ足りれば済まして置くといった風な、伝統的な性癖を容易に改める様子もない。そして時に依つては、西洋人の極端な規則づくめと神經質とをうる、さがるような氣味合いも見える。欧米流の礼儀作法としいえは事ごとに反感を寄せ、自分の国の風習なら一夫多妻の制度をさえ是認しにんしていた晩年の辜鴻銘ここうめい翁などは、定めしこんな事象に対しても相当の意見があつたであらう。そういえば印度のタゴール翁、ガンジー氏などは何んというであろうか。彼らの国も物臭さにおいては敢て支那に引けを取らないようであるが。

なおこれは余談ながら、アメリカの記者は支那が外国から金を借りて元金も利子も払わない不信を攻め、この点において「南京政府はモスコの真似まねをしている」といつている。が、単に金銭上の問題ばかりでなく、不潔なこともこの両国民は甚だ似通つていはいはないか。但しこの方は執方が本家か分らないが、私の知れる限りにおいて、白人のうちではロシア人が一番汚い。凡おほそロシア人の多く泊まつているホテルの便所は、大概支那の汽車のそれと同じような觀

を呈する。ロシア人が西洋人の中で最も東洋人に近いことは、この一点でも証明されるように思う。

○

とにかくこの「物臭さ」、「億劫がり」は東洋人の特色であつて、私は仮りにこれを「東洋的懶惰」と名づける。

ところでこういう氣風は、仏教や老莊の無為の思想、「怠け者の哲学」に影響されているのであろうが、実はそんな「思想」などに關係なく、もつと卑近な日常生活の諸相に行き渡つていたのであつて、その根ざしは案外に深く、われわれの氣候風土體質等に胚胎し、仏教や老莊の哲学はむしろそれらの環境が逆に生み出したものであると考える方が自然に近い。

怠け者の「哲学」や「思想」だけなら、西洋にだつて必ずしもないことはあるまい。古代のギリシヤにはディオゲネスのような一種の物臭太郎もいたが、しかしそれも哲学的見地から出發したところの学者としての態度であつて、日本や支那に無数にころがつている物臭人種の如く、ただ何んという理由もなくぐうたらに日を送つていたのではあるまい。あの時代の克己主義の哲学というものは、消極的ではあるが、物慾を征服しようとする一念が強く、多分に努力的、意志的であつて、「解脱」とか、「真如」とか、「涅槃」とか、「大悟徹底」とかいう境涯からはよほどかけ離れているようである。それからまた、仙人だの隱者だのという者もないことはないが、彼らの多くはいわゆる「哲学者の石」を発見せんとするアルケミストの類であつて、あたかも支那の葛洪仙人の如く、「無為」とか「怠け者」とかいうよりはむしろ「神秘」の觀念と結び付けられているように想像される。

近代において「自然に復れ」という説を唱えたジャン・ジャック・ルーソーの思想は、幾分

老荘のそれに相通うところがあるといわれるが、私は、実は、それこそ怠け者のためにまだ『エミール』一冊をすら読んだことがないので何んともいえない。しかしそういう思想や哲学はどうであろうとも、実際の日常生活において、西洋人は断じて「物臭」でもなければ「怠け者」でもない。それは彼らの体質、表情、皮膚の色、服装、生活様式等、あらゆる条件からそうなっているのだ、たまたま何らかの事情のために不潔や不規律を余儀なくされることはあつても、東洋人が懶惰のうちに或る安らかな別乾坤を打開するような心持は、夢にも理解し得ないであろう。彼らは富める者も、貧しい者も、遊ぶ者も、働く者も、老人も、青年も、学者も、政治家も、実業家も、芸術家も、労働者も、等しく進取的、活動的、奮闘的である点において差別はない。

「東洋人の精神的もしくは道徳的というのは果して何を意味するか。東洋人は浮世を捨てて山の中へ隠遁し、独り冥想に耽つているようなのを聖人といい、高潔の士という。しかし西洋ではそんな人間を聖人だとも高潔の士だとも思わない、それは一種のエゴイストに過ぎない。われわれは勇ましく街頭に出で、病める者に薬餌を与え、貧しき者に物資を恵み、社会一般の幸福を増進するために身を犠牲にして働く人を、真の道徳家であるといい、そういう仕事を精神的の事業というのだ。」——と、大体こういう趣意のことをジョン・デュウイが書いていたのを讀んだことがあるが、これが西洋における一般の考え方の標準、——常識であるとすれば、恐らく「怠ける」ということ、「何もしないでいる」ということは、彼らの眼から見て悪徳中の悪徳であろう。われわれ東洋人といえども、「怠けること」が「働くこと」より精神的だと極め込んでいる訳ではないから、このアメリカの哲学者の説に正面から反対する気はないし、そう堂々と開き直つて来られると挨拶のしようにも困るのだが、いったい欧米人の「社会のために身を犠牲にして働く」というのはどんな場合を指すのだろうか。

たとえば基督教の運動に「救世軍」というものがある。私はその事業なりそれに携わる人々に対して敬意をこそ抱け、決して反感や悪意を感ずる者ではない。しかしその動機の如何にかかわらず、ああいう風に街頭に立つて、激越な、早口な、性急な口調で説教したり、自由廃業の援助に奔走したり、貧民窟を軒並みに叩いて慰問品を贈ったり、一人々々行人の袂を捉えて慈善鍋への寄附をすすめピラを配るといふような、せせこましい、瑣々屑々たる遣り方は、不幸にして甚だ東洋人の気風に合わない。それは理窟を超越した肌合の問題であつて、東洋人にはお互に解つてゐるはずの心理である。ああいう運動を見せられると、われわれは足元から追い立てられるように忙しい氣持がするばかりで、少しもしんみりした同情心や信仰心が湧いて来ない。人はよく仏教徒の布教や救済の方法が、基督教に比べて退嬰的なのを攻めるけれども、実はあの方が終局において国民性に叶つてゐるのである。鎌倉時代の日蓮宗や蓮如時代の真宗がいかに積極的、能動的であつたといつても、帰するところは七字の題目や六字の名号にあつて、ああいう風に現世的な枝葉のことにまで係わつてゐたのではあるまい。禅宗の道元の如きは「仏教のための人生であつて人生のための仏教でない」といふ風に考えていたらしい。基督教とは千里の差があるように思う。

諸葛孔明が玄德に三度も草廬を驚かされて、仕方なしにその重い腰を持ち上げたのは『三国志』でお馴染みの話である。われわれは、もし孔明が玄德に引つ張り出されるまでもなく、もつと早くから世に出て活動してゐたとしたら、それもまた結構な事だと思ふが、いくら玄德に懇請されても逃げ隠れして現れずにしまい、閑雲野鶴を友として世を終つたら、その心持にもなかなか同情出来るのである。支那では昔から「明哲保身の道」といふ言葉があり、争乱を避けて一身を全うするのも、また一つの処世術と考えられている。戦国の世に蘇秦が錦を着て故郷へ帰り、「我をして負廓の田二頃あらしめば豈六国の相印を佩びんや」とか何んとかいつて威張つ

たという話があるが、立身出世して六国の相印を佩びるのもいいけれども、負廓の田二頃を耕しつつ生涯田舎に埋れることも悪くはない。但し、こんなことをいつて得意がる蘇秦という男は、何んだかこの頃の代議士みたいで、孔明などに比べると大分品格が落ちるようである。事実東洋においては、蘇秦型より孔明型の人物の方が、単に品格ばかりでなく、本質的にも傑すぐれている例が多いのである。

○

私はこの頃、いろいろの映画雑誌に載っているホリーウッドのキネマ・スタアたちの写真を見て、しばしば変な気がするところがある。というのは、彼らの顔を大写しにした肖像を見ると、殆ど一人の例外もなく、悉ことごとく歯を露あらわして笑っている。そしてこれもまた一人の例外もなく、その歯がどんな俳優のでも実に見事に、真珠のような粒つぶが揃そろって真っ白に並んでいるのである。が、彼らの表情を仔細しさいにじつと視詰みめていると、その笑い顔がどうしても笑っているようには思えないで、無理に可笑おかしくも何んともないのに唇くちびるを開けて、歯並びを見せびらかしているようにしか取れないのである。よく日本の女の児こがあくたいを吐く時に「いーッ」といつて歯を出す、ちょうどあれと同じである。その感じが、女優の場合にはそれほど極端でないけれども、男優の場合には特に顕著である。こんな気持のするのは大方私一人ではあるまい。読者諸君がもし疑われるなら、早速『クラシック』でも開ひらいて試たして御覧になるといい。一遍そう思おもい出したら、どの俳優の肖像でも「笑い顔」が忽たちまち「歯をムキ出している顔」に見えること甚おだ妙である。

文化の進んだ人種ほど歯の手入れを大切にす。歯列はなはびの美しさ如何に依つてその種族の文明の程度が推し測られるという。それがほんとうなら、歯科医学の最も進歩したアメリカこそは

世界一の文明国であり、かのわざとらしい無気味なる笑顔を作る俳優たちは、「己はこの通りの文明人だぞ」というところを誇示しているのかも知れない。そして私の如く生れつきの乱杭歯の持ち主で、それを療治しようとしてもしない者は、かつて故大山元帥のあばた面がそうされたように、手もなく未開人の標本にされても仕方がない。尤もこの頃は日本人でも私のようなのは例外であつて、少し気の利いた都会には何処へ行つてもアメリカ仕込みの歯科医の店が繁昌しており、中には脳貧血を起すぐらいは覚悟の前で立派に使用に堪える天賦の歯を抜いたり切つたりして人工的の裝飾を施す。そのせいか知らぬが、近来都会人の歯は日増しに美しくなつて昔のような乱杭歯や八重歯や茄子歯はめつきりと少くなつた。男女を問わず、礼儀や容姿に気を付ける人は、歯研き一つ買うにしてもコリノスだとかペソデントだとか、アメリカの舶載品を使つて、念の入つたのは朝夕二度も歯を研く。だから日本人の歯は、一日々々と真つ白に真珠色になり、それだけアメリカ人に近く、文明人になりつつある。人に快感を与えることを目的とする以上、これは悪いことではない。が、元来日本では八重歯や味噌ッ歯の不揃いなところに自然の愛嬌を認めたもので、あまり色の真つ白な歯がズラリと綺麗に列んでいるのは、何んとなく酷薄な、奸黠残忍な感じがするとされたものだつた。それで、東京、京都、大阪などの大都會の美人というものは、(いや、男でもそうだが、)大体において歯の性が悪く、かつ不揃いである。殊に京の女の歯の汚いことは殆ど定説になつてゐる。私の知るところでは、かえつて九州あたりの辺陬の人に歯列の美しいのが多い。(だから九州の人は薄情だといふのではないから、怒つてはいけない。)また老人などは、煙草のやにで黄色く汚れて、手摺れのした象牙のような色をしているのが、白毛交りの疎髻の隙から見えたりするとかにも老人らしく、皮膚の色ともよく調和して、のんびりした、悠々迫らざる感じを抱かせるもので、中には一本や二本ぐらい抜け落ちたままに捨ててあるのも、決してそんなに見苦しいものではない。今ではこ

ういう黄色い歯を持つ老人は、田舎へでも行かない限り日本では見られなくなってしまうが、支那や朝鮮へ行けばザラにある。老人の歯の真つ白に揃っているのは、少くとも東洋人の容貌には調和しない。入れ歯をするにもなるべく自然に近いようにすべきで、年寄りのくせに余り若がつて綺麗にしたのは、「四十過ぎての厚化粧」で、へんにイヤ味なものである。

○

上山草人の話をきくと、アメリカでは礼儀作法が実にやかましい。男子が女子の前で肉体の一部を見せてならないことは勿論、鼻をかんでも嘔つても咳をしてもいけない。だから風邪でも引いた時は何処へも出られず、一日家に籠っているより仕方がないという。この調子だと、今にアメリカ人は鼻の穴から臀の穴まで、舐めてもいいようにキレイに掃除をし、垂れる糞までが麝香のような匂を放つようにしなければ、真の文明人ではないとい出すかも知れない。これと似たような話は、かつて故芥川君から又聞きしたのだが、成瀬正一氏が独逸で或る家に客となつて、芥川君の「或る日の大石内蔵助」をその場で訳しながら読んで聴かせた時、「内蔵助は立つて廁へ行つた」という句に行き当つてハタとつかえた。そしてとうとう「廁」という語を訳さずじまつたというのである。

ポール・モーランの小説などには「廁」という語がちよいちよい出て来るから、近頃の仏蘭西あたりはそれほどでないのもあろうが、どうも欧米人というものはこういうことに變に氣を廻す癖があり、それを文明人の資格と心得ているらしい。

○

トルストイの「クロイツェル・ソナタ」を読んだ人は御承知であろう。あの中で、あの小説

の主人公は欧羅巴^{ヨーロッパ}のいわゆる文明人の生活ぶりを口を極めて批難している。彼らの日常の食物や婦人の服装などを見ると、甚だしく刺戟的、積極的で、どうしても劣情を挑発する目的にか出来ていないのに、一方において礼儀作法をやかましくいうのは虚偽である、——と、今その本が手元にならないのでハッキリ想い出せないが、たしかそういう意味のことで、私はあれを読んだとき、さすがにトルストイはロシア人であると思つた。

実際、紳士が夜会の席などで、足枷手枷を箠められたような礼装をして、あの誘惑的な婦人の服装を前にしながら、オクビをしてもシャッキリをしてもスープをすすする音を立ててもいけないなどという札法に束縛されて食卓に就いたのでは、いかに善尽し美尽しの料理を並べられても何んの御馳走^{ごちそう}になるであろう。そこへ行くと支那人の宴会は、「食う」「飲む」という目的のために大概な不作法を許容する。いかに騒々しい音を立てても床やテーブルをどんなに汚しても差支えなく、夏など南の方へ行けば、主人から先に上衣^{うわぎ}を脱いで、腰からは素ツ裸になる。日本もこの点において支那と大した変りはない。

ホテルの食堂というものは、家族的で、花やかで、旧式な旅館の個人主義なのよりいいという人がある。しかしながら、あれは紳士淑女が服装を見せびらかし、虚栄心を満足させるための処で、食う方は二の次にされているように見える。浴衣^{ゆかた}がけで脇息^{きょうそく}に靠れたり足^{もた}を投げ出したりしてたべる方が、胃の腑^ふはたしかに喜ぶのである。

これを要するに、西洋人の「文明的施設」といい、「清潔」といい、「整頓」といいのは、あのアメリカ人の歯のようなものではないのであろうか？　そういえば私は、あの白い汚れ目のない歯列を見ると、何んとなく西洋便所のタイル張りの床を想い出すのである。



今日われわれが悩んでいる二重生活の矛盾ということも、衣食住の様式といったような末節の点にあるのではなく、その由来するところはもつと眼に見えない深い原因に依るのだと思う。つまりわれわれは絶対に畳のない家に住み、朝から晩まで洋服を着、洋食を食うように努めてみても、なかなかそれが続けられないで、しまいには洋室に火鉢を持ち込んだり絨毯じゅうたんの上へすわったりするようになるのは、やはり何んといつても東洋人の持ち前たる「ふしだら」や「億劫おつくうがり」が心の奥に根を張っているからである。第一われわれは食事の時間を規則的に極められることに苦痛を感じず。昼間事務所で働く人は、その間だけやむなく規則的になるが、家庭へ帰れば直ぐ不規則になる。またそうしなければ本当に落ち着いて休息し、一杯やりながら物を食うという気になれない。だから勤め先で昼飯を食う多くの日本人は、ほんの弁当代りに、簡単な物を大急ぎで掻かつ込んで置くだけであるが、神戸や横浜に住む西洋人はそうではない。近い所に家庭のある者はかなり忙しい思いをしてでも必ず一定の時間に家に帰り、食堂に打ちくつろいで食事をし、酒を飲み、そしてまた時間までには事務所へ帰る。そんな慌あわただしい思いをして何が面白いといたいけれど、彼らはそういう規則づくめに馴なれているのである。それに洋食の料理法というものが、何時何分に食堂へ這入はいるとキッチリ極きめてもらわなければコックが困るようになっている。だから日本人はしばしば「何時に召し上りますか」とコックに執拗しつように念を押されて腹を立てることがあるが、ずべらをすればどんなに料理がまずくなつても、コックは決して責任を負わない。

一事が万事である。食器にしても、箸はしや碗わんならざつと洗つておけば済むが、西洋料理は材料が脂あぶらっこいのだし、銀器や磁器やガラスの器が多いのだから、始終ピカピカに研ぐように気をつけなければならぬ。われわれはこういう無数の煩わづらわしい拘束に堪えてまでも二重生活を打破しようという気持には、容易になりにくいのである。

イギリス人は老人でも朝から濃厚なビフテキを食い、そして盛んにスポーツをして精力を貯え、体力を養う。これも一つの養生法であるには違いない。しかしながら無精な人間の眼から見ると、刺戟性の食物を多量に摂取するために、否でも応でも運動しなければ消化し切れないということになつては、スポーツも一種の苦役である。それだけの時間を静かに読書にでも費した方が、あるいはもつと有益であるかも知れない。いわんやトルストイの言の如く、その刺戟のために一層性慾を煽つて煩惱の火を掻き立てる結果となり、精力の濫費を来たすとしたら、つまる所は食う物を減らして怠けているものと孰方が善いか分らなくなる。

昔、といつてもついわれわれの祖母の時代の頃までは、堅気な家の女房というものは殆ど一年中日の目も見えないような薄暗い部屋の奥にいて、めつたに外へ出ることはなかつた。京大阪あたりの旧家では、入浴さえ五日に一遍ぐらいだつたという。そして「御隠居さん」といわれるような身分になれば、一日べつたりと据わつたきり座蒲団の上をさえ動きはしない。今から思うとそんな風にしてどうして生きていられたか不思議であるが、彼らのたべる物といつては、ほんの僅かな、ごく淡泊な、鳥の摺り餌のようなものだつた。粥、梅干、梅びしお、でんぶ、煮豆、佃煮、——私は今でも祖母の膳の上にあつたそういう品々を想い出すことが出来る。彼女たちには彼女たち相応な消極的な摂生法があつて、多くの場合活動的な男子よりも長寿を保つていたのである。

「寝てばかりいては毒だ」というが、同時に食物の量を減らし、種類を減らせば、それだけ伝染病などの危険を冒す度も少い。カロリーのヴィタミンだのとやかましくいつて時間や神経を使う隙に、何もしないで寝ころんでいる方が賢いという考え方もある。世の中には「怠け

者の哲学」があるように、「怠け者の養生法」もあることを忘れてはならない。

○

今大阪で一流に数えられる老けんぎ校ぎょうの話に、昔は地じうた唄をうたう場合に余り大きな声を出して発音を明瞭にいうと、かえって下品だといつて叱られたものだという。なるほどそういえば、琴や三味線の巧い検校で声量の大きく美しい人は、関西には割りに少い。が、そうかといつて、楽器の方を大切に唄はおうそかにするという訳ではない。じつと落ちて聞いていければ、声は小さくても節廻しは細かく、余情も心持も十分に行き渡っているのである。ただ彼らは、今の声楽家のようにアルコールを節し、女色を節しても喉のどを大切にし、声量の保存に努めるといふ心がけがない。つまり何処までも気分本位で、そんな堅しわが苦しい思いをして唄ったのでは、唄っても愉快でないであろう。老年になれば声量が減り、皺しわが来るとするのは自然ことわりの理であるから、敢てそれに逆らおうとしないで、自分に心行く限り唄おうとするのであろう。実際本人に取ってみれば、酔って陶然とした時にふと三味線を取り上げて唄うのでなければ、何んの面白味もない訳である。かかる考からすれば、人に聞えないほどの微かすかな鼻声で唄っていても、自分では技巧の妙を味わい尽すことが出来、三味境さんまいきように這はい入れるのであつて、極端にいえば声を出さずに空想で唄っても事は足りる。

自分が楽しむよりも人を楽しませることを主眼とする西洋流の音楽は、この点において何処か窮屈で、努力的、作爲的である。聞いていて羨うらやましい声量だとは思つても、その唇の動きを見てみると何んだか声を出す機械のような気がして、わざとらしい感じが伴う。だから唄っている本人の三味境の心持が聴衆に伝わるというようなことは無いといつていい。これは音楽のみならず、総べての芸術においてこの傾きがあると思う。

○

誤解をされては困るが、私は決して怠け者になることを諸君にすすめる次第ではない。が、精力家とか勤勉家とかいわれることを鼻にかけ、あるいはそれを自分の方から押し売りする人が多い世の中だから、たまには懶惰の美德——奥床しきを想起しても害にはなるまいと思うのである。正直のところ、そういう私自身が実はそんなに怠け者ではなく、先ずわれわれの仲間うちでは勉強家の方であることは、友人諸氏が証明してくれるであらう。

（昭和五年四月十日記）